

目次

霧の島のかがり火

5

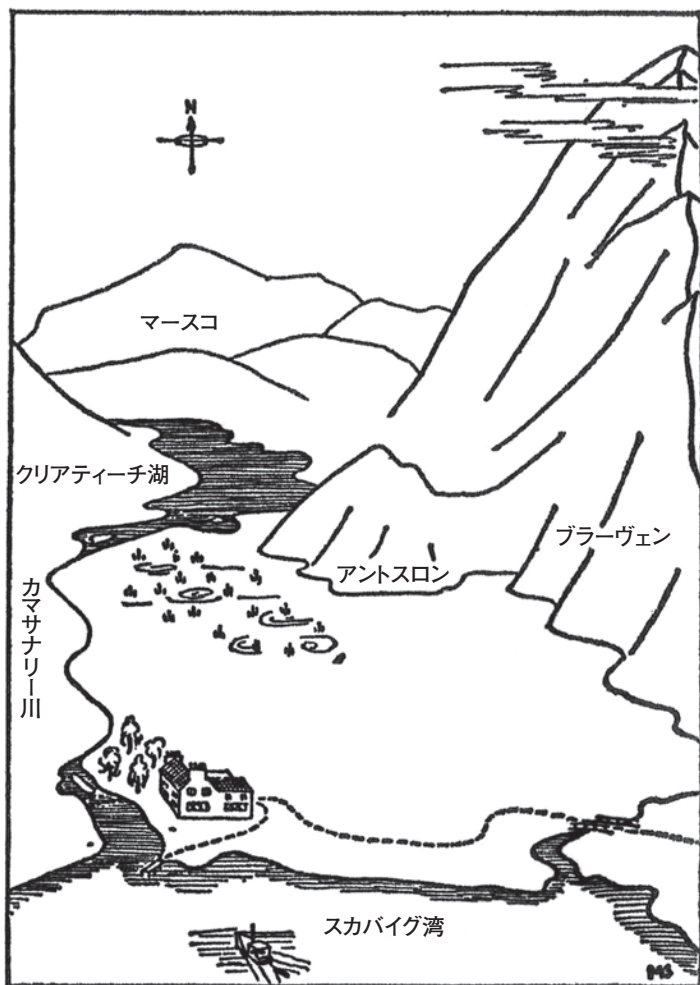
訳者あとがき 258

解説 真田啓介 260

主要登場人物

- ジアンネッタ・ドルーリー（ジャネット・ブルック）……ファッションモデル。本編の語り手
- ニコラス・ドルーリー……作家。ジアンネッタの元夫
- ロデリック・グラント……登山好きな男性
- マーシャ・マリニング……舞台女優
- アラステア・ブレイン……広告代理店勤務
- ロナルド・ビーグル……有名な登山家
- ヒューバート・ヘイ……トラベルライター
- マリオン・ブラッドフォード……教師
- ロバータ・サイムズ……教師。マリオンの同僚
- カウドリー＝シン普森大佐……軍人
- ハートリー・コリガン……釣り好きな男性
- アルマ・コリガン……ハートリーの妻
- ビル・パーシモン……ホテルのオーナー
- ヘザー・マクレイ……山で殺された娘
- ドゥーガル・マクレイ……釣りのガイド。ヘザーの父親
- ジェイムジー・ファレーイン……ヘザーの元恋人
- マッケンジー……インヴァネス警察の警部補
- ヘクター・マンロー……インヴァネス警察の巡査部長。愛称ヘッキー

霧の島のかがり火



「午前零時には燃え上がる。あいつも頭にきていたから暴力沙汰を起こし、つかまるかもしれないぞ。なりゆきを見届けるとするか」

シリル・ターナー作『復讐者の悲劇』、第二幕第三場より

スカイ島のカマサナリーにはホテルもなければ、スレイトの山地から手つかずの美しい入江へ渡れる道路もありません。作者の一存で、この土地の地理にいくつか手を加えたことをお許しください。岩肌ガリに岩溝ツをあけ、尾根バに向かってツせり上トがる岩壁スをそこかしこに作ったからといって、青い山ブラーヴェンは気にしないでしよう。

それから、実際の天候も変更しました。エリザベス二世女王の戴冠式の日スカイ島をご記憶のかたはおわかりでしょうが、天気を好転させるしかなかったのです。

第一章 霧に包まれた島

そもそも、両親がわたしにジアネッタという変わった名前をつけたのがいけない。これじたいはすてきな名前でも、ティツィアーノの風俗画に描かれた年増の美女の姿が浮かんでしまう。たしかにわたしは、かのヴェネツィア派の巨匠の目を引きそうな赤毛だけれど、実はイングランドの片田舎の牧師館で育った内気な娘だ。ティツィアーノの中期の作品群に描かれた娼館のヴィーナスとは似ても似つかない女といったら、このわたしじゃない。

両親に義理を立てて、うちの家系には高級娼婦めいた女がいたことを打ち明けておこう。もちろん昔の話だけれど、それでもいたという事実は変わりない。母はのほほんとして、芸術家肌で感傷的なたちで、平気で赤毛の娘をその女狐ヴィーナスヴィクセンにちなんで名づける人だ。赤毛の美女ジアネッタ・フォックスはかつてロンドンの寵児であり、美人には大文字のBビュティがつき、美貌と資本キャピタルが同一視されがちな時代の美人だった。麗しのジアネッタは素性の知れない者で、たしか母親はイタリア人とのハーフだ。彼女は父親が誰か知っていたとしても、けっしてそれを認めなかった。ただ姿を現し、ヴィーナスがヴィクトリア朝のホワイトチャペルのごみためから抜け出して、一八五八年の春にロンドンをあつと驚かせた。わずか十七歳だった。二十歳になるまでに、ありとあらゆる有名画家（動物画家のランドシアアを除く）のモデルを務め、ありとあらゆる寓意的なポーズを取り、噂では、順番にすべ

での画家の愛人にもなったという。この点も、ランドシアアを疑わしきは罰せずとしたい。一八六一年、ジアネッタは特殊な力を買われて、さる準男爵と結婚した。サー・チャールズはどうかこうにか結婚生活を続けてふたりの子供をもうけたが、ジアネッタが家を出て——裸婦ばかり描くフランスの、現代的な、画家のもとに走った。息子と娘はいいかげんな父親の手にゆだねられた。その息子がわたしの母方の祖父に当たる。

そこで、気のいい、のほほんとした、芸術家肌の母は、わがコッツウォルズの牧師館でかわいい皿や鉢を作っては庭の片隅にある窯で焼き、娘にいかかわしい（ばかりか有名な）曾祖母にちなんだ名をつけた。次はわたしが一九四五年にロンドンに出たら、どうなるかを考えもせず。

あのときわたしは十九歳で、八カ月前に学校を出ていた。ウエストエンドでモデルの訓練コースを終えたばかりで、高級婦人服メーカーと契約を結び、ファッションモデルになる華麗なキャリアを無邪気に歩み出そうとしていた。持っていたのはワンルームのアパートメントと少額の銀行口座（父からの餞別）、手焼きの壺を二個と灰皿一枚（母からの贈り物）、そしてスケジュール帳（兄のルーシヤスからの贈り物）。最高の気分だった。

わたしが最高の気分であったころ、モレリ画廊が『緑の袖の貴婦人』というツオルナーの油絵を入手して、マルコ・モレリ——かのマルコ・モレリ——がその絵で世間をあつと言わせようと思いついた。あの一件を覚えているだろうか。モレリの狙いは、戦時中の耐乏生活を経て芸術への回帰を演出することだったようだ。それにはうってつけの一枚が選ばれた。『緑の袖の貴婦人』は、ツオルナーの一八六〇年代における超絶した技巧を誇示していた。カンバスの中央で思い悩む等身大の美女は、宝石と羽根と刺繍が施されたシルクの複雑な輝きに包まれている。あの大きな緑色の袖のきらめくダマス

ク織ほど、みごとに描かれた生地はないと思う。耐乏生活から抜け出すきっかけとして、たしかに効果的だった。ただし、さすがのツオルナーの虹の色使いもモデルの旺盛な活力を奪えず、燃え立つ髪の毛を消せなかった。あれはジアネッタ・フォックスが正装してカンバスに現れた最後の作品であり、彼女はその機会を存分に生かす雰囲気を漂わせていた。

それはモレリも、そのいとこのモンテフィアも同様だった。後者はファッションデザイナーで、わたしの雇い主でもある。モンテフィアがすてきな緑の袖がついたドレスを再現して、わたしがそれをシヨールで着て、しかるべき分野で大評判になれば、おおいにとこたちの役に立つて言うことなしだ。おまけに、ヒューゴーから話を持ちかけられたときはそう思わなかったけれど、わたしの役にも立ちそうだった。とにかく嬉しくて、わくわくして、ひどく緊張したものだ。

こうしてわたしはシヨールで緑の袖のドレスを着て、モレリは注目を集めた。わたしはファッション業界の人たちが怖くてたまらず、固い声で話したので、つつけんどんに聞こえたにちがひなかった。事実、見かけも口ぶりも、背後に飾られた油絵に描かれた俗物のまがい物だったのだろう。なぜならニコラス・ドルーリーはわたしをそんな女だと思ひ込み、人込みをかきわけてまで自己紹介したからだ。わたしのほうはニコラスの噂を聞いていたけれど、だからといって自信を持てなかった。当時ニコラスは——二十九歳で——自分の名義で三冊の面白い小説を刊行しており、毒舌で知られていた。わたしは怯えて立ちすくみ、ニコラスに茶化すような目を向けられて小娘のたわごとを並べたところ、なんと、女の媚だと受け取られた。三カ月後にわたしたちは結婚した。

それから三年間のことは話したくない。わたしは狂ったように、猛烈に、愚かにもニコラスに恋をしていた。それまでと正反対の生活に飛び込んだ夢見るおばかさんだった。ニコラスのほうも、たち

まちわかつたように、やはり勝手が違っていた。結婚相手は現代版のジアンネッタ・フォックスのはずだった。彼が住み慣れたテンポの速い社会に流されない、冷静で洗練された若い女。ところが、実際に手に入れたのはただのジアンネッタ・ブルックだった。正体は女学生に毛が生えたようなもの。その落ち着きはモンテフィアのサロンとモデル養成校で身につけたにわか仕込みのテクニクだった。

このはなからのミスキャストがわたしたちのささやかな悲劇の原因ではない。愛は大きな橋を架ける。新婚時代はふたりの絆がどんな隙間も埋めてくれる気がした。ニコラスだつてわたしに負けないくらい努力していた。思い返してみると、それがわかる。わたしがちよつと如才なく振舞いさえすれば、ニコラスはまたやさしくしようとした。でも、もう手遅れだった。出会ったときから手遅れだった。ふたりは世代が違っていて、差が大きすぎた——十歳の年齢差ではなく、むしろ長きに渡る世界大戦の持つ意味で。わたしにとって大戦は、人生に影を落とさない思春期の記憶にすぎないが、ニコラスにとってはいまだに繰り返す悪夢の苦しみであり、当時は心の傷痕が危なっかしく覆っていた。どうやってわたしが、無垢な十九歳がニコラスを苦しめたようなストレスを理解すればよかったのだろう。そして彼はどうすれば、わたしのあやふやな自信の底に不安の牙が隠れていると見抜けただろうか。

理由はどうあれ、破局はすぐに訪れた。二年後、結婚生活は破綻していたも同然だった。ニコラスはよく取材旅行に出かけたので、前にもましてわたしを同伴しない理由を見つけるようになった。やがて夫に連れがいたとわかって、驚きはしなかったけれど、傷つき、悔しくて、それに——やつぱり赤毛だから——ずけずけ文句を言った。

あのとニコラスをつなぎとめておきたかったら、口を慎むべきだった。愛が弱みになり、残酷か